

M氏ノ運転シタ風景ノ記憶⑤

田植えが終わって、田んぼは水で満ちている。

その土手には、静々と歩いている老婆とその孫らしき子供二人。

(この子供達は、将来、この風景をどう思い出すんだろう・・・)

父は、僕が十歳ぐらいまでバイクで福島機関区へ通っていた。

よく休日はバイクの後ろに乗せられていた。

僕が行きたいような場所へ行ってくれるはずもなく、父の思いつきの場所ばかり。水たまりの多い山道を走り、バイクが水たまりに入る度に泥が跳ね上がった。そして、だいたい行き着く場所は小高い山の見晴らしの良い場所である。

「どうだ。いい景色だろう」と父は自慢げに言った。

「ほら、お前も食え」と、パンパンに膨れたポケットから夏みかんを出す。

「いらぬよ」と言っているのに、父は夏みかんを剥き始めた。

「他に何かないの」と聞くと、

「あるわけあんめえ」そういういながら、黙々と夏みかんを食べている。

食べ終わると、残りかすをひとまとめにして、近くの畑のゴミ穴に捨てた。そして、広がる田んぼを眺めながら父は僕に言うのだ。

「あの三つ目の山むこうがアメリカだったら、どうする？」

「英語しゃべれねえもん。困るべよ」と仕方なく僕は答える。

「んだがらなあ、英語勉強せねばいかんのだぞ」と父は言った。

見下ろした田んぼは水で満ちていて、鏡のように空が映っていた。

